

か も 市 史 だ よ り

平成28年3月
No.33

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



上下条法音寺の木造金剛力士像

造像の時期は寛文三年（一六六三、
「下条村誌」と天明年間（一七八一
～八九、「法音寺略史」）の二説があ
ります。胸・腹部の平板な表現など
から寛文三年までは遡れませんが、
裳の広がりが小さく、内部に手斧目
が残るなど古様なところもあり、天
明年間よりは古い一八世紀前半頃と
思われます。

法音寺の二王堂に、二メートルを
越す金剛力士像が祀られています。
もと下条にあった長福寺ゆかりの像
が上杉氏に隨い会津（福島県）へ移
転した後は損傷が進んだので、旧仏
の一部を腹中に納め、新たに造立し
たのが本像と伝わります。

二体ともに目を怒らし、口を開く
阿形像は右前方を向き、吽形像は口
を閉じて左前方を向き、両手は力を
こめて体側に開き、足を力強く踏み
出しています。ヒバ材の寄木造で頭・
体部の中心で前後左右の堅四材を寄
せ、さらに両肩から先の腕・手は各
二～三材を接いでいます。木柄の大
きな部材の接合には、舟板などの接
合に用いる枉（中央がくびれた鎌状
の木片）を使っています。また、吽形像の
胸内には木箱様なものが認められま
す。あるいは伝承の旧仏の一部かも
しれません。

石河荘と青海荘

平安時代の後期から戦国時代の末期にかけて、現在の加茂市内に領域が入り組んだ二つの荘園がありました。石河荘と青海荘です。その位置関係をみるとことにしてみましょう。

石河荘の成り立ち

石河荘は、寛治四年（一〇九〇）七月に白河上皇が京都の下賀茂社に一九荘を寄進する際、その一つとして越後国の公田四〇町を割いて設立されました。

その後、石河荘は、各地の上賀茂社や下賀茂社の荘園によくみられるように、現地では賀茂荘と通称されて越後国の公田四〇町を割いて設立されました。

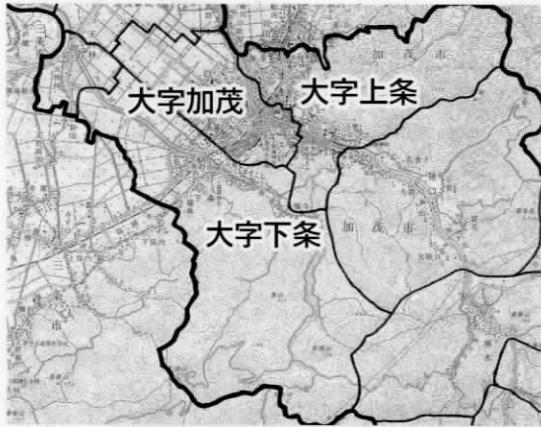
ました。そのカモノの名が中世末期の賀茂村、近世の加茂町や加茂村、さらに現在の大字加茂に継承されました。したがって、石河荘の位置はおよそ現在の大字加茂に比定してよいでしょう。

青海荘の成り立ち

一方、青海荘は、鳥羽上皇の院政時代（一二二九～五六）に鳥羽院領の荘園として設立されました。

戦国時代の領域は現在の三条市井栗付近から旧白根市蓑口（新潟市南区）付近にまで及びました。設立当初から加茂市や田上町南部を中心とする広大な荘園であったと思われます。青海荘という名前も、律令時代の蒲原郡青海郷のほぼ全域を荘園に切りかえたことによるとみてよいでしょう。

その広い青海荘をいくつかに区分した地域名のうち、上条と下条は地名の一一致からおよそ現在の加茂市大字上条と大字下条に比定することができます。



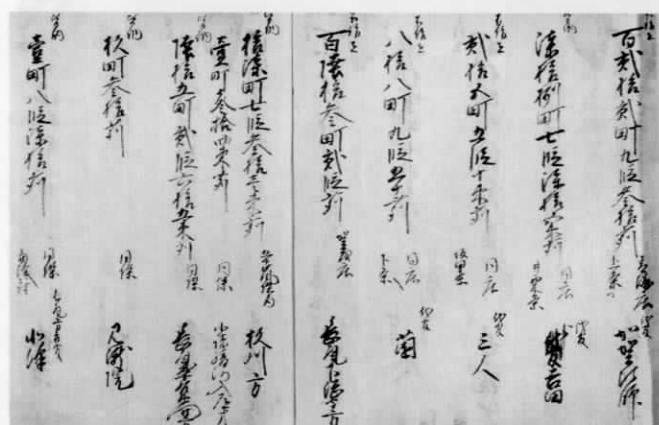
▲ 上条・加茂・下条の位置関係

入り組む領域

そこで、現在の大字加茂、大字上条、大字下条の位置を参考にして、莊園内で最も開発が進んでいたとみられる丘陵のふもと付近をみると、石河荘は青海荘の上条と下条の間に割り込む形、逆に青海荘は石河荘に分断される形になっていたと思われます。青海郷を青海荘に切りかえる際、すでに成立していた石河荘の領域を除いたためだと思われます。その結果、下条は、加茂川以北を主要部とする青海荘のなかで飛び地

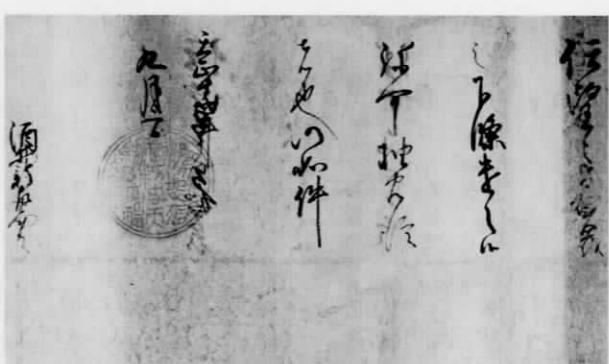
▲ 五世紀末成立の「蒲原郡段錢帳」

「青海庄上条」「同庄下条」とみえる



のような状態となりました。しかも、石河荘の南に連続していたことと、その石河荘の通称である賀茂荘や賀茂が著名な地名であったことがありました。ときに「賀茂庄下条」とか「賀茂之下条」と呼ばれることがあります。

ところが、現在、大字上条の地籍が例外的に加茂川の南岸にもあって、新町付近から加茂山の裏手の山中を抜けて大字下条に達しています。同様に青海荘の時代の上条と下条もこの山中でかろうじてつながっていた可能性があります。その場合、石河荘は三方を青海荘に囲まれ、西方だけが低湿地帯に向かって開いていたことになります。



▲ 天正11年（1583）上杉景勝宛行状（新潟県立歴史博物館所蔵）「賀茂之下条」とある



▲ 加茂経営伝習農場（昭和26年頃）

加茂経営伝習農場の教育は、農業改良助長法に基づく協同農業普及事業の一環として、中学校卒業程度の学力を持つ男女を対象に行われていました。教育期間が一年の長期生、冬場の四か月間の短期生を合わせ、毎年九〇名前後の入場生があり、寄宿舎で共同生活を送っていました。

教育課程は、生産実習がおよそ六割、学科三割、4Hクラブ等が一割で、時間割以外の全ての時間は「生活教育課程」とされ、共同生活の中

経営伝習農場の教育目標は、「農業改良精神の旺盛な紳士の養成」であり、農村幹部となる青年を育てる教育機関の設置は、有本のかねてからの目標とするものでした。

加茂経営伝習農場は、農村工業指導所（現在の新潟県食品研究所）の付属農場が改組され、長岡の栖吉にあった新潟県立農民道場を合わせる形で発足したものです。

農村工業指導所は、農産加工技術

を普及し、恐慌に苦しむ農村を救うため、加茂農林一期生で同校教諭であった有本誠作の提唱によって設立されました。

加茂農林の教育目標は、「自治的

精神の旺盛な紳士の養成」であり、農村幹部となる青年を育てる教育機関の設置は、有本のかねてからの目標とするものでした。

加茂経営伝習農場の教育



▲ 左：洋裁の授業 右：畜舎にて（昭和25年）



で、職員・場長も一緒になつて農村生活の近代化という問題に取り組みました。伝習農場では、改良普及技術を学びました。



生活改善運動を中心として

経営伝習農場が巻町（新潟市西蒲区）に移転した昭和三十八年まで、ここを卒業した生徒は一一二七名にも上ります。

一般に、農民は保守的で、自分の目で見て納得しなければなかなか新しいことをやろうとしないところがあると言われます。その意味で、農業技術だけでなく、洋裁や料理、生け花やクラブ活動、生徒会活動や各種行事、見学旅行を通して生徒達が身に付けた新しい知識や考え方は、本県の農村を大きく変え、生活を改善する力になつたと言えます。

加茂の花火史

黎明期の花火

花火は球形の紙玉に火薬などの薬品を詰め込み、空高く打ち上げ破裂させ、華麗な光の花を咲かせる芸術です。製造は天文十二年（一五四三）の鉄砲伝来以後といわれています。

青海神社・長瀬神社の祭礼を始め、大規模な祭りが多く催される加茂市は、県下でも稀な花火地帯

◆ 加茂町開催の花火大会を報ずる
記事（『新潟新聞』明治43・11・8）

○ 加茂煙火大會終了。既報の如く加茂煙火大會は四五の兩日を以て終了し六日正午大昌寺に於て褒賞並に賞品授與式を行ふ而して煙火の寄贈者へは抽籤にて寄贈品を贈與したるが幸也者は準備の周到なるに満足し例毎年大會を開催せらるんことを申込みたるが受賞者は左の如し

十九八七六五四三二一等等等等等等等等等等等
片貝戸新小浦加長田長加百見崎田嶺藏
北澤長入道金之助吉渡瀬清流
中川柳吉阿部煙火製造部
小泉留吉本間煙火製造部
黒崎金融

です。煙火（烟火）とも呼ばれる花火の製造には大量の和紙が必要で、紙漉き農家が多くいた七谷を擁する市域には、この産業が盛んになる下地が古くからありました。市域での花火作りは江戸時代からあつたと考えられます、確実な記録では、明治十七年（一八八四）に狭口村の市川徳平が烟花営業の官許を得たのを嚆矢とします（『新潟新聞』明治17・9・13）。

この当時花火製造に携わったのは市川一人に留まらず、明治時代の新聞には阿部貞次（狭口村）・久保田榮六（加茂町谷通り）といった花火師の名前がみえています。明治四十三年に各地の花火師が集まり、加茂山で花火大会（煙火大会）が開かれた際には、十等までの上位に加茂町から見越入道・渡

邊清策・阿部煙火製造部の三者が入賞しています（『新潟新聞』明治43・11・8）。加茂町で大会が開かれたこと自体、町に有能な花火師が複数おり、それを支える有力者も存在したことの反映ともいえそうです。

市域の煙火製造を支えたのが、花火を愛好した大衆の存在でした。大正時代の初め頃まで、青年たちは火薬の調合だけを煙火師に頼み、寄りあって好みの色を出す工夫をし、加茂川べりで楽しんだといいます（『加茂市政だより』昭和52・9・15）。打ち上げ用の筒は木製で、集落の神社などに置かれてありました。筒は、大正末年頃になると鉄製へと変化しました。

花火生産の隆盛

こうした前史があつて、昭和時代に入り、市域の花火製造はいつそう盛んになりました。昭和三十五年（一九六〇）、当時の金田綱雄市長は、花火製造の取材に訪れた

同社では、打ち上げ花火のほかにおもちゃ花火（玩具花火）も手掛けました。一般家庭で気軽に楽しむ玩具花火は、規格品を大量に作る必要があります。こうした生産を支えたのは家庭の主婦と子どもでした。昭和三十年に市役所がした調査によると、市域では中・高校生も含めて二百余名が内職で花火を作り、このうち七割は主婦だったといいます（『北越公論』昭和30・5・11）。こうしてできた玩具花火はデパートに出荷されたほか、一部は輸出もされました。



◆ 木製花火の筒（阿部煙火工業寄贈、民俗資料館所蔵）

漫画家の岡部冬彦へ、「タンスとマカロニと花火、この三つが加茂市の名産なのです」と説明したといいます（『オール讀物』昭和三十五年九月号）。

岡部が取材に訪れたのは阿部煙